平成 30年度　西東京市立　　谷戸第二小学校　学校評価計画表

学校教育目標

〇学ぶ喜び　〇集う喜び　〇伸びる喜び　をつかむ子

平成31年2月16日

目指す学校像（ビジョン）

【目指す学校像】　一人一人の児童のよさが、最大限に発揮できる学校。

【目指す児童・生徒像】　しっかり聞く子　じっくり考える子　はっきり話す子　力を合わせて活動する子

【目指す教師像】　児童を理解し、最良な人的環境となれるように関わる教師
指導方法と計画・評価、環境整備等を工夫改善して、着実に学習・生活指導を行う教師
学校組織の一員として協力・協働してして取り組む教師

＜学校関係者による評価標語＞
A：自己評価は適切である。
B：自己評価は適切でない。
C：評価のための資料が不足している
D：評価は不可能である。

前年度までの学校経営上の成果と課題

昨年度は校内研究とも融合しながら、子供の学び意欲を高め、問題解決的な学習を多く取り入れた楽しく充実した授業を展開することができた。新年度も落ち着いた態度で授業を展開できている。本年度も「一人一人の児童のよさが、最大限に発揮できる学校」を目指し、学習内容を見える化し、操作し、友達と協働して組み立てていけような授業の充実を継続していく。併せて再度学習規律の徹底を図っていく。また、安心・安全な学校をつくるためにも、学校からの情報発信に努め、保護者・地域が学校に関わり、連携していただける機会を積極的に作っていく。

	具体的方策	第　1　回 学校自己評価 努力目標 教員評価AB	成果目標 児童教科AB	学校の取組み及び改善策	学校関係者評価	第　2　回 努力目標 教員評価AB	成果目標 児童教科AB	学校の取組み及び改善策
豊かな心の育成	ア：児童のよさを見付け・認め、挑戦を励ます言葉かけを毎時間励行する。	3 95.8%	3 児童 86%	各学級で、子供のよさを認め、積極的に言葉かけをするように努めている。帰りの会などで児童のよい言動を、発表させるなど工夫しているクラスもある。自己肯定感を高めたり、自主的に取り組んだりする姿勢を育てていく目的を見失わずに、児童を認めていく姿勢を大切にしていきたい	A	4 100%	3 児童 85%	100%の教師が児童を褒めていると認識しているのに対し、児童の15%はそう感じていない。小さなことでも、大きなことでも、常に子どものよさを見つけて声かけをしていく週間をすべての教員が身に付けることができるよう努力していく。また、学級担任、学年に限らず、全職員で全児童に関わっていく意識をもち、組織的な教育を展開していく。
	イ：道徳授業は、文部科学省作成の「みんなの道徳」等を活用し、「考える道徳」「議論する道徳」を意識して行い、授業の充実を進める。	3 94.7%	3 児童 92%	授業の充実のために、デジタル教科書使いながらの読み語りで資料提示を行ったり、BGMやハートメーターを活用したりしているクラスもある。めあてを児童と共に考える取組も行った。「考える道徳」「議論する道徳」は意識したが、毎時間取り入れることができなかった。道徳推進教師を中心に、今後も計画的に授業改善していく。	B	4 100%	3 児童 88%	本校は市全体の道徳教育推進委員会の師範授業を本校で実施するなど、効果的な道徳授業を実践している教員が多い。校内OJTや校内での授業公開などを行い、学校全体の道徳授業さらなる充実を図りたい。
確かな学力の向上	ウ：学習の見通しや達成感をもてるように、授業の導入部で学習の「ねらい」を共有し、授業の終わりには学習内容・方法の「ふりかえり」のある授業を積み重ねる。	3 95.7%	4 児童 90%	どの授業でも必ず「めあて」「ふりかえり」を行い習慣化させ、身に付いてきた。観察・実験のめあてを明らかにし、予想を立てることが定着してきた。子供と教師で「めあて」を決めると、子供が意欲的に活動するようになった。より効果的な学習とするため「めあて」のもたせ方など教員で共有していく必要もある。	B	4 95.7%	4 児童 91%	「めあて、ふりかえり」の学習展開はほぼすべての教員が実施できている。一方、10%近い児童が「できていない」評価をしているのは、「めあて」が自分自身のものになっていなかったり、納得のいく「ふりかえり」ができていない現状があるものと思われる。ルーティーンとしての「めあて、ふりかえり」ではなく、児童が主体的にもつ「めあて」になるよう授業改善をしていく。
	エ：思考・表現力を高めるため、体験活動を基盤におき、国語科との関連的な指導と見える化、操作化、協同、個別の熟考表現のある授業を全教科等で積み重ねる。	4 100%	3 児童 88%	観察・実験の結果を図や絵を工夫して表現し、自分の考えの根拠を見える化し、協同で実験を行った。また、話し合いが主となる様な授業展開も工夫した。総合では、思考ツールを使ったが、他の教科ではなかなか使い切れなかった。効果のあった取組を、研修などを通して全教員で共有化していく。	A	4 100%	3 児童 88%	第一回同様、各教員工夫を凝らした授業を実践してきた。しかし、年度が代わるごとに思考行ツールなど、これまでの研究で培ってきた教育財産の伝承が課題になってくる。校内研修・研究を通じて意識的に活用していきたい。
	オ：「見える・わかる授業」の具体化のため、思考ツール、ミニホワイトボード、ICT機器活用のある授業を効果的に実施する。	3 86.4%	3 児童 91%	書画カメラやICT機器を活用しながら、興味を引き出し、資料を提示して児童の考えを深めていこうとする学級が増えた。書画カメラでノートを映して指導したり、タイマーを映して終わりの時間を意識させたりするなど、活用範囲が広がっている。ミニホワイトボードを活用した取組を、研修などを通して全教員で共有化していく。	A	4 95．5%	3 児童 88%	それぞれに工夫した教材提示や、ICT機器の活用を行っている、カラー印刷機の故障やカメラの老朽化など、ハード面での課題もあった。予算上の制限や市の規約上の制約もあるが教育委員会とも連携しながら対応していきたい。
	カ：算数科の習熟度別学習と、東京ベーシックドリルのシステム的な活用を継続する。同時に、隔週の補習を年間実施して、算数科の基礎力の習得を確かにする。	2 71.4%	2 保護者 94% 児童82%	レビュータイム（放課後の補習指導）では、やる気を出す児童が多くいた。授業で理解できなかった部分も、個別に指導することで、よくできていた。計算の苦手な児童に、さらに下の学年のベーシックドリルを使って指導し、基礎を固めた。ベーシックドリルの効果的な活用法について、さらに工夫をし、活用機会を増やしていく。	A	4 100%	3 保護者 94% 児童77%	児童への質問文は「東京ﾍﾞｰｼｯｸﾄﾞﾘﾙでできないところを確認することができましたか。」としているが満足度は他に比べ低い。基礎力定着に関してはベーシックドリル限らず幅広い教材や手立てが必要であることも明らかになってきた。次年度より朝のベーシックタイムを算数タイムとして、ドリルやプリントなども含めて基礎力向上に努めていく。
	キ：「思考・表現力などの資質・能力」を高めるため、*「生活科と総合的な学習の時間」*の学習に取り組み、探究と協同のある学習を充実させる．国語。	3 89.5%	3 保護者 94% 児童86%	昨年の「生活科と総合的な学習の時間」に引き続き、児童の思考力・表現力等の能力を育てる授業をつくるために、試行錯誤中である。現在までに国語において2回の研究授業を行っている。著名な講師による師範授業など、様々な手法で校内研究の充実を図っている。	A	4 100%	4 保護者 96% 児童91%	今年度の研究を踏まえ、次年度も『自分の考えをもち、主体的に表現できる児童の育成～物語の学習を通して～』を研究テーマとして校内研究をを継続していく。
健やかな体の育成	ク：体力向上のため、短縄週間等の体育的活動を、毎学期、計画的に実施する。	4 95.2%	3 保護者 99% 児童87%	体育的活動が計画的に進められ、子供たちは、短縄や大縄に意欲的に取り組んでいる。休み時間にクラスで協力して大縄の回数を競い合う姿が見られる。目標をもって学級で取り組むことで、体力だけではなく、学級の団結力も上がっている。今後も児童の体力向上のために、体育の授業の充実を図っていく。	A	4 100%	4 保護者 99% 児童98%	学校からの取組だけではなく、今年度は体育委員会児童主催のクラス対抗の球技の大会などを実施した。担当が後押しをしたものではあるが、児童が大変主体的に動き、教育効果のある活動であった。今後もこうした取組を仕組んでいきたい。各種取組週間は精選していく。
保護者・地域との連携	コ：学級・学年で、保護者や地域の方々にボランティアを依頼し、地域の教育力を活用する。	4 100%	4 保護者 97%	読み聞かせボランティアでは、5月頃から本格的に活動していただいている。環境整備では、学校からの呼びかけではなく、保護者が進んで花壇を整備をしてくださった。今後も、学習補助など、学級・学年で積極的に依頼していく。	A	4 100%	4 保護者 98%	前回の評価委員会のご意見も活かし、1年生と近隣保育園児友交流を企画している。他のボランティア活動も、よいものは継続し、組織や募集方法について合理化模していく。メールの配信での募集など効果的であった。